

事業委員会主催 道南技術士委員会共催 技術研修会(宿泊コース)報告

1. はじめに

令和元年度の技術研修会(宿泊コース)を以下の要領で開催しました。

技術研修会の主な見学内容について報告します。

- 日時：令和元年 9月 27日(金)～ 28日(土)
- 見学先：函館市内“コンクリート遺産”(函館漁港船入潤防波堤、函館どつく第1号乾ドック、東本願寺函館別院、元町配水池、笹流れダム等)
- 参加人数：1日目：21名 2日目：16名
- 宿泊所：湯元 漁火館

2. 技術研修会概要

今回は、コンクリートによって造られた文化遺産“コンクリート遺産”が数多く存在する函館において、今も現役で活躍している施設を見学しました。見学にあたっては道南技術士委員会の布村氏にご同行頂き、見学施設にまつわる数々のエピソードを交えた解説を頂きました。

3. 見学内容

(1) 函館漁港船入潤防波堤

近代港湾整備の先駆者である廣井勇博士が調査・設計を手掛けたものです。明治32年に完成し、100年以上経過した現在でも現役で機能しています。防波堤の近くには記念碑が立っています。



函館漁港船入潤防波堤



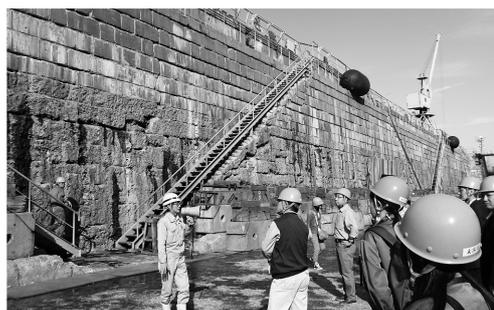
布村氏による説明(横は函館港改良工事記念碑)

(2) 函館どつく～第1号乾ドック

函館どつく函館造船所にある日本最古級のブロック積み乾ドックで、明治36年に完成しています。普段は船の修繕等で立ち入れませんが今回は運よくドック下まで降りることができました。第1号乾ドックは全長181.10m、幅24.45m、深さ9.05mで、経済産業省の「近代化産業遺産」に認定されています。見学にあたっては、函館どつく(株)総務部武田係長にご同行頂き詳しい説明を頂きました。



第1号乾ドック



函館どつく(株)武田係長(中央左)による説明

(3) 東本願寺函館別院

明治40年の大火により焼失後、耐火建築にて再建されることになり、大正4年日本初の鉄筋コンクリート造りの寺院として建立されました。鋼材の改修工事は行われていても、RC本体は創建当時のままです。当時の函館は度重なる大火に見舞われており、大火に強い建築物が求められていましたが、人の踏んだ土砂を建物の材料とすることに異論を唱える信徒も多く、使用する骨材を水洗いして使用したようです。



東本願寺函館別院

(4) 元町配水池

明治22年完成の中央配水池と明治29年完成の高区配水池があり、当時の人口増加に伴う水量不足、伝染病の流行を契機に、元町から10キロ近く離れた赤川を水源として、生活用水を導水するために造られたものです。イギリス製の鑄鉄管を用い、ポンプ等の動力は使用せず、逆サイフォンの原理を利用して元町の配水池まで水を運んでいます。日本人が設計した日本最古の配水池であり、100年以上経過したものが現在でも使われています。



元町配水池(現在は池の上部に蓋がされている)

(5) 笹流ダム

函館市が管理する水道専用ダムであり、大正12年に竣工した日本初のバットレスダムです。函館市は、横浜市に続いて全国で2番目に近代水道技術が導入され、この中で第2次拡張事業として函館市へ

の水道供給増強を図る水源として建設されました。バットレス型式は、重力式コンクリートダムに比べ、当時高価だったコンクリートの使用量を少なくすることを目的として採用されたようです。ダムの前庭広場は樹木と緑の芝生に覆われ、春は桜、秋は紅葉の名所として市民の憩いの場となっています。「函館市の水道施設群」として土木学会選奨土木遺産2001に選定されています。



笹流ダム

4. おわりに

今回は、コンクリートによって造られた文化遺産が数多く存在する函館を2日間に渡って見学することで、函館の魅力を再発見する研修会となりました。函館どつく内の施設見学に同行頂いた函館どつく(株)武田係長、2日間に渡り研修会に同行頂いた道南技術士委員会の布村氏に感謝の意を表します。

今回も、盛況のうちに無事見学会を終える事ができました。ご参加の皆様、並びに関係者の皆様、ご協力ありがとうございました。



湯元漁火館での懇親会(乾杯：飯野委員長)

参考 今回見学した施設以外にも函館には多くの“コンクリート遺産”が存在します。詳しくは函館湾岸価値創造プロジェクト【GRHABIP】(グラビップ)HPをご参照下さい。**函館 コンクリート** 🔍 **検索**